

第七章 シュニグ祭
第八章 その他の諸祝祭

琉球文化圏の原始信仰はこの小さな与論島にも大いなる影響をおよぼした。シュニグ祭もその一つで、与論人は独自のやり方で神々を祀った。上の写真は海の神「アマミキヨ」を祀る赤碕ウガン。

第七章 シニグ祭

一 シニグの起こりと盛衰

昭和初年頃のシニグのやり方と大東亜戦争後のものを比べると、戦後の特に昭和三十年以後のやり方は大分簡素化されている。シニグの祭りを行うには相当の経費を要するので、次第に簡素化の方向に傾きつつある。今後全く廃止されるということは有り得ないであろうが、一層簡素化された形態で行われるであろう。「シニグ」の祭が行われるようになったのは、与論島に稲作が始められた後の古代に属するとみてよからう。その頃の祭りの方式とそれ以後のものとは、時代の推移とともに少しずつ異なるとみなければならぬ。次には、シニグ祭について時代区分をして、それぞれの概観を試みてみよう。

第一期 原初の古神道に基づく時代

第二期 琉球文化影響下の時代

第三期 薩藩治下の時代

第四期 明治中頃の再興以後の時代

第五期 大東亜戦争後の時代

第一期時代は原初から奄美の世までの時代で、その頃は樹木や石や屋敷（ヤアドウクル）や稲穂等を神体としての汎神道が行われ、新米で御酒ミキを作り、古神道に基づくシニグ祭が行われていたものとみられる。茶花のハニクサアクラの神体は自然の樹木と石が用いられ、グシク（グスクとも）のマササアクラでは、根石ニイシ（地に根をもち成長する石との信仰がある）を神体に行っているが、これらはこの時代の面影をとどめたものであろう。なお、この時代では、女性系の氏族の宗家の女が「ヌル」（祈女・女神職）の役を務め、神憑かりをして吉凶豊年の神の託宣を告げ、血族の弥栄イヤサカを乞い祈み奉コノっていたらう。ヌル（沖縄や奄美のノロに当たる）は、決して琉球神道の影響のみによって生じたものとみるべきではなく、琉球神道以前の古代から存していたともみるべきであらう。すべての祭事は女が主として司祭していただろう（今でも死者の命日等女が当たっている）。この時代のシニグは、氏族達が祭りをを行い酒盛りをしつつウタカキの神

遊びが楽しく行われ、パラチ意識をより強め、他の氏族に劣らぬ武技力を養い、サアクラは他面レクリエーションの場にもなっていたであろう。

第二期時代のシニグには、ニツチエエサアクラの宣スリ言ケツにほのめかされているごとく、英雄もしくは豪雄（一般にアアジンケエ、朝戸ではアアジンチエエとも）が結び付けられ、四つ足（牛を代表とする）と豊作との関連づけがなされ、併せて琉球神道の影響を受けて、ヌルの祭祀奉仕が厳しく形式化され、男性系の宗教の男がシニグ祭を司祭するようになったのである。極めて物忌みが行われシニグ祭の変質した時代でもあった。以前のシニグ神遊びに用いられた太鼓・ツヅミ・笛の楽器に、新しく三味線が加えられ、シニグ歌遊びや直会ナヲライの歌舞の場が、一層盛大かつ賑やかなものとなり、シニグは男女両系のパラチないし血縁達にとって、不可欠の楽しいものともなったのである。

第三期時代のシニグでは、薩藩治下に入る直前、豊年踊として本土風の一番組と二番組の歌詞と舞踊が創作され、それを常主神社の祭神に奉納舞踊してから、七月十

七日のシニグ本祭のサアクラで（主としてグシクのサアクラ）舞踊するようになって、一名シニグ踊とも言われるようになった。この時代の末期すなわち明治三年までは、シニグは毎年行われていたようである。明治四年琴平神社が創建された時、同社の神主として沖永良部島から来島した鎌田常助が、古くから伝承されてきたシニグやウンジャンの祭祀は、新しい時代にそぐわないものであるから廃止すべきであるということを提案したので、各部落ごとに集会を開き論議の結果、ついに永い間行われてきたシニグは同年廃止されるに至ったのである。

また、この時代においては、シニグの七日前からヌルはミシキ楔して神小屋にこもり、悔やみ所や出産家に入入りせず、刺激物や臭い物を食べず、物忌みをして神の託宣を受け、シニグ祭の時にそれを祭主に告げていた。

第四期時代に入る前、明治三十二年になってシニグと豊年踊の廃止論が再び燃え上がった時の論議の際ウンジャン祭も復活させてはとの意見も多かったようであるが、すでに当時から三十年近く前にウンジャン祭は廃止されていたため、祭典の方式の全部や宣言の神歌の全

部を記憶している者がなかったため、ウンジャン祭の復活は実現しなかった。

第四期のシニグの方式は、大体昭和十年頃までは、明治初年の廃止当時のものとどめた部分が多かったが、昭和十二年支那事変が起こり、以後大東亜戦争の起こるに伴い、祭りの方式も簡素化されたり、空襲下では思うように行うことができなかつたりしたのである。

第五期の時代のシニグは大東亜戦争後のものであって、戦後の物資不足、民心の錯乱、経済の不況、米軍による本土との分離統治、米国思想の流入等の影響を受け、大部分簡素化された形で行われるようになった。麦屋のサアクラでは、パラヂがマサムヌ（うまさ物・こちそう）を携えて食べ合うことはせず、単に焼酎だけを飲むというところもある。この期にはシニグを行わなくなったサアクラもある。例えば、立長のトウムイ、麦屋東区のアダマのサアクラのごとく。現在残っている各サアクラにおける祭りやパンタ（小高い丘）でのシニグ祭の方式は、以前のものとはかなり隔たった形態において行われている。また、祭主は普通宗家の世襲であるが、戦後の祭主

を務めている者の中には、宗家の者でないパラチが当たっているものもある。

二 シニグとは

シニグは、沖永良部島ではすでに早くから廃止になっているし、北部沖縄では大分衰退しているようである。

シニグは、稲に関して氏族間で行われる祭りのことである。「シニグ」の発音は、島内の一般的には、シニグ（sinigu）の形で用いられる。沖永良部でもシニグという語形は古老の間で聞かれる。麦屋字では、シニユグ（sinjugu）の形で表され、他にまれに、シヌグ（sinugu）の形で表す者もいる。神話の中に語り伝えられている「シニグク」という神名は、男神であって「稲穀^{シニグク}」の意を表すものである。アマミク（アマミクワ・女神・天御子）の対の神であるが、「シニグク」を神名にしたのは、稲穀をはじめて作った神であるから、後の人が神名化したものであるろう。シニグは、与論島の開発租神の「シニグク」に由来するものとみられる。

「シニグ」は稲に関する祭りであるから、稲を示す古

語の「シニ」（奈良朝本土語ではシネ）と、穀物を示す古語の「グク」との複合形たる、シニグク（siniguku）が原形だったのである。その形から末尾の「ク」音を省略して、「シニグ」という語形が用いられるようになったのである。「シニユグ」は「シニグ」からの変化形であり、「シヌグ」は「シニユグ」からの転訛^{テンカ}形である。「シニユグ」や「シヌグ」という形からは語源推定が困難である。古歌に「ナビヌスク中ニ、グクヌタマリ」とあり、シニグ神歌に、グクヌ神（穀の袖）という語形も表されている。そのような点から、「シニグ」は「シニグク」からの省略形とみて誤りはないだろう。動詞シヌギユイ（^シ凌ギ居リ）から転化して、「シニユグ」となったとみる人があるかもしれないが、このみかたは語学的に無理であり、連用形を名詞化する例は多いが、動詞の終止形を名詞化する例は、与論方言には無いから、シヌギユイから「シニユグ」や「シニグ」が生じたとは、どうしても考えられない。

シニグの祭事は、単にシニグ、またはシニグヌマツリ、シニグヌトオトウ（トオトウは祭祀のこと）と言われ、

尊称の形としてシニグガナシとも言われている。旧暦七月十六日に、サアクラ造り・神路づくり、その他の準備をして、若干のサアクラでは前夜祭が行われ、十七日に本祭を行い、十八日には中休みをするサアクラが多く、十九日に直会ナラライとサアクラ片付け・神路直しが行われている。

この祭事は、われわれの遠い祖先が稲作を始めた古代に起こったもので、あらゆる祭祀の基調をなすものである。稲に靈魂の存することを意識してあがめ、稲を永久にわれわれの最上の食物と選び定め給うたことの意義を祭祀化したものである。部落または字の古い家柄であるウプヤア（大家）すなわち宗家を中心として（宗家をシニグ元ムトウという）、氏族または血縁の者（チイタニとも、血種）が寄り集まって、新穀を大神ウツカミ（祖神・遠祖）に供奉、自然の樹木や石等に神靈の宿るのを信じ、豊年を祈み願ひ、あわせて血族の幸運を禱ネぎ奉る祭祀なのである。それでシニグ祭は、日本国の氏族制度と祭祀の原形を研究する上に、まことに貴重なものである。

三 シニグのパラチ

シニグはパラチによって祭事が行われる。「パラチ」とは血族または親戚のことである。パラチには、ヲウナグヌパタ（女系の側）と、ヲウヅガヌパタ（男系の側）との親戚がある。婚姻による夫婦のそれぞれ双方の親戚がパラチの概念に入る。与論島は今でも母系的パラチの意識が強く、父方の親族とよりも母方との親族の方に、親密感とパラチ意識をより強くいだいている。これは母系性社会集団の名残であろう。パラチには、八世代まで、七世代まで、五世代までの子孫の氏族範囲を含めるサアクラが多い。シニグにおけるパラチは、血縁を同じくする者達により構成され、これらの者はシニグの祭りを介してパラチ意識をより強固にするのである。しかし、古代の本来のパラチは、氏族の血縁のみを指し姻戚を含まなかったものとみられる。だからシニグ祭の発生した初期の古代（おそらく弥生時代であろう）では、母系性パラチによって行われていたかもしれない。

パラチの語源については、腹ハラウヂ氏に由来するものかも

しれない。同じ母の腹から生まれた血縁系統の同胞を、古代日本語では、パラカラ（またはパラガラ）と言っていたから、パラ（腹・胎）とウディ（*udi*・氏）と複合したパラウディから、パラウチ（*para·udzi*）へ変化し、その形からさらに「ウ」音節を脱落して現行形のパラチ（*paradzi*）が生じたのであろう。妊娠するの意を示す動詞の「パラミユイ」（はらんでいる）は、パラ（腹・胎）の動詞化されたパラミと、ヨウリ（居り）との複合によって構成されたとみられるから、パラチは、パラウディ（腹氏・胎氏）に語源を求めてよいだろう。

四 シニグの祭舎たるサアクラ

シニグ祭の行われる祭場（祭舎・齋庭^{ユニバ}）を「サアクラ」という。昭和十年頃までは茶花のハニク^{ハニク}のシニグは、高倉において祭りが行われ、それがすんで後ミダラパンタの丘に登って、そこで祭りが行われ歌舞の神遊びがなされるパルシニグ（原^{パル}にて行うシニグ）を行っていた。それ以後は、高倉が戦災のため焼失したので、仮小屋を造ってそこを祭場とし、ミダラパンタに登ることをしている。

シニグ祭の行われる祭場は、シニグ元（ウプヤア）の屋敷内か近くの広場が充てられるが、そこは昔の御屋（宮）跡が高倉の存した跡だったらしい（ハニクでは以前の高倉の跡の近くに仮小屋を造っている）。プカナサアクラの現在の祭場になっている所には、明治の頃までは高倉があつたとのことである。昔の宗家または高倉の遺跡を祭場とすべく、そこに粗末な小屋が建てられ血縁の者達が集まって祭りが行われる。

島内のすべてのサアクラが、大昔から高倉を祭場として祭りを行っていたのではないだろう。ハニクやプカナ以外の他のシニグ元では、高倉を持つ者が少なかったので、明治年間においても仮小屋を建てていたところが多かつたらしい（高倉は富者でなければ建てられない）。

『日本書紀』の「神武天皇紀」には、「高倉」の語が出ているから、わが国の高倉の建築発生はかなり古い古代にさかのぼるだろう。与論島（や南島）の高倉も古代に発生しただろう。サアクラの場所を、シニグドウクル（シニグを行う所、麦屋ではシニグドウの簡略形で表す人もいる）という。

一般には、サアクラ (sa¹ akura) と発音しているが、

グシク字では、ザアクラ (za¹ akura) の形で発音され (以前にはサアクラの清音形で発音されていた)、麦屋辺りでは、ダアクラ (da¹ akura) の形で発音されている。いずれが古くからの正しい形であるのか、これについて明らかにせねばならない。大山彦一氏は、『南西諸島の家族制度の研究』(昭和三十五年八月、関書院)において、座元 (シニグの祭主をつとめるシニグ元・ウヤカタ) を、ザームトまたはダームトと発音する例にみるように、ザの音はダに転ずる。サークラはザークラすなわち座倉である。座倉は高倉の下を意味する (二三七ページ)

と述べ、座して祭りが行われるから座倉を語源と解している。この所見はグスクと麦屋の濁音形を基にして考えられたものであるが、これは正しいものとは思われない。その理由は、次に記す本土古代文献の資料からと、果たして遠い与論古代に、「坐る・座す」の意を示す語として「ザア」や「ダア」が存在していたか、との疑いの点からである。

『古事記』の「仲哀天皇記」には、神功皇后の御歌「この御酒は我が御酒ならず 献り来し御酒ぞ、残さず食せ、佐佐」と、武内宿禰の歌「この御酒を醸みけむ人は この御酒の御酒のあやにうた楽し、佐佐」との二首の歌を「酒楽の歌」といつている。『琴歌譜』には、『古事記』の右の二首と同じ歌を挙げて、それに「十六日節酒坐歌二」と題をつけている。

この「酒楽」「酒坐」は共に「サカクラ」とよまれている。「神楽」を「カグラ」とよませているから、酒楽の「楽」は「クラ」とよむことができる。酒坐は「酒座」のことである。「クラ」という語は、米などを貯蔵する倉庫の「クラ」のことである。サカクラは酒の座 (酒宴の座席) であり「酒倉」を示す語である。すなわち、高倉の床の上で座り合ってウタゲしたことの酒宴の内容を文字化して、『琴歌譜』は「酒坐」と書き、『古事記』は楽しみなごみ合う場面を文字化して「酒楽」と書いたままである。

このことから、与論島のシニグ祭を行う祭舎の場としての「サアクラ」は、サカクラ (sakakura・酒倉) に起

源を求めることができるだろう。そのサカクラから、サハクラ (sahakura) に変化し、さらにその形から現行形のサアクラ (sa^hakura) に変化したものとみることが可能である。与論方言では、^hが^oに変化する現象が表される。例えば、カタ (kata・肩) をハタ (hata) といい、カサ (kasa・笠) をハサ (hasa) という類である。だから、サカクラの「カ」(ka) が「ハ」(ha) に変化し、その「ハ」(ha) の^hが落ちて現在のサアクラ (sa^hakura) の「ア」(a) になったものである。

茶花のハニクサアクラでは、以前には高倉の中でシニグが行われ酒盛りもなされていた。多人数のため高倉の床の上に座りきれない者は、高倉の周りにムシ口またはゴザを敷いて座っていた。大昔はシニグ元の宗家は高倉を持っていて、そこでシニグ祭や直会を行い、その後パシニグ祭を行った後の高倉は、酒宴の場としての酒倉にもなっていたのである。それで大山氏が言うような、座して祭りが行われる座倉^{ザアクラ}や転訛形のダアクラに、サアクラの語源を求むべきではない。固有の古代日本語に、座

る(座す)の意味を表すザアとかダアという語は存在しない。グシクのザアクラという発音形や、麦屋のダアクラという発音形は、サアクラからの変化形である。サアがザアに変化し、ザアがさらにダアに変化したとみられるから、麦屋字のダアクラが最も変化しすぎている。

サアクラは地名を冠して言われるのが普通である。すべて サアクラと言うべきであるが、ここには現行の発音形を示しておく。シヨオダアクラ、サキマダアクラ、キンダアクラ、アダマダアクラ、プカナサアクラ、ニツチエエサアクラ、サトウヌシサアクラ、ユントウクサアクラ、プサトウサアクラ、クルパナサアクラ、グシクマザアクラ、ホオチザアクラ、クチビヤアザアクラ、ミイラザアクラ、メエダザアクラ、イチヌサアクラ、トウマリサアクラ、トウムイサアクラ、ハニクサアクラがある。以前には、ユクイ、テイラサキ、ハチピキのサアクラもあつた。筆者が昭和十年頃グシク字で耳にした発音形は、ホオチサアクラなどのごとく「サアクラ」と言っていた。

与論島神話に伝えられているごとく「世の始まりはシヨオの御屋」であるから、西区のシヨオサアクラが、

シニグの起源的には最も古いものである。そこに隣接するサキマ・キン・アダマのサアクラが、続いてシニグを行うようになり、以下プカナ・ニツチエエ・サトウヌシ等のサアクラが行うようになったものとみられる。遠祖を祭ってシニグを行う元^{ムトウ}サアクラから、分家してシニグを行う所が「別^{ワカ}リサアクラ」である。グシク・立長・茶花字のサアクラは、ワカリサアクラであろう。大正末期から昭和初期の支那事変以前のどのサアクラにおいても、大体同じような形態での祭りの方式を行っていたようであるが、その後の戦時下や終戦後の諸事情によって、シニグは大部分簡素化され、今では、ハニクサアクラとニツチエエサアクラのみが、やや古い形態のシニグを踏襲している。

五 サアクラ造りとその他の準備

いずれのサアクラも造り方や構造は大同小異である。

サアクラは、まず六尺余の高さの四本の柱（竹または雑木の技葉を切り除けて間に合わせる）を、横木または横

竹と結いつけ、大体二間半四方形（約五メートル平方）の間取りをして、屋根は日射を避けるため^{トマ}苫を載せるか、フウバ葉（コバ）かカヤをかぶせる。この小屋すなわちサアクラの中には、ゴザまたは藁か草を敷き座れるようにする。サアクラを造る時には簡単な浄め祓いの祭行事がなされる。サアクラ造りには、シニグ元の近親の二、三人の男がこれに当たる。江戸時代にはサアクラ（高倉か小屋）とは別に神小屋が造られ、七日前から又ルが禊してこもっていた（明治初年には三日前）。朝戸や麦屋のシニグ元においては、以前には旧七月十六日に、昔のウガンにて祭主は禊して夜通し夢の中に神の啓示を受け、神がかりして神がのり移り、翌十七日の本祭を終え、^{カミウケ}神送イがすむまで神としての資格と待遇が与えられていた（この種の神憑かりの点について、大山彦一氏は大陸文化の影響を受けたと解しているが、これは疑わしい）。現在の祭主は、十六日の前夜祭の始まる前か十七日の早朝に、簡単に身を浄める程度のことしかやっていないが、江戸時代には三日前から禊していたらしい。

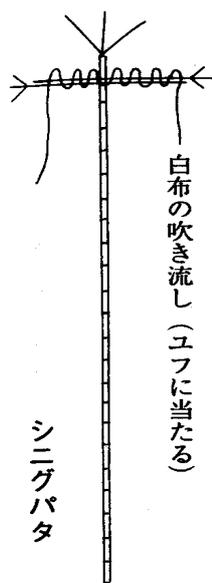
また、第四期の再興の頃から明治末期までは、物忌み

は厳しく守られていた。シニグ祭がすんだ後、次の祭りまでに死人のあつた家はシニグ祭には参加できなかつた（大正年間になつて忌中は当年だけ参加できぬことに緩和された）。また祭りの当月に出産のあつた家や出産予定の家、また、当月火災のあつた家も参加できず、祭りの前や祭りの期間にけんか口論することも許されなかつた。大東亜戦争後これらは大分緩和されている。

十六日には、「^{カミチツク}神路作り」が行われる。手に鎌を持ち紙衣を着て雑草や雑木が切り除けられ石を取り除き、紙の衣のまま通れるように路を開き作るのである。これは神の通る「サキパライ」（先被い）を意味する。シニグの神路とは、この島における大昔の移住経路を示すものようで、幾度か遠祖が来島して住みついた者もあれば、島内の一部落における人口増と共に島内の他の地域へ移住した時、すなわちシニグ元から分かれた血縁達がつ通つて行った「別カリヤア」（分家）の小路でもある。これに通ずる路もあればシニグ元へ通ずるものもある。これらに神路は、今では池になつていたり耕作地（田畑）に化していたり、雑木の茂る個所だつたりしている。

十六日には、シニグ元ではシニグ旗^{バタ}が、他の氏子では弓と矢（弓は桑木で作られるのが古式）が作られる。シニグパタは、約三尋くらいの長さの青竹を切り、先端の小枝を三本残しておき、他の杖葉はすべて切り除けられ、一メートルくらいの長さの小竹を二本（これも先端の杖葉を少し残す）、竹根の方に向かって左と右に束ね、上から白布で巻きつける。図示すると次のとおりである。

八ニクサアクラの吹き流しは、赤・白・青の三色の布を巻きつける（昭和三十二年）。以前には赤・白・青・黄・紫の五色ごとの旗が作られていたらしい。今は大部



分のサアクラでは白布のみ巻いた旗一本が作られているが、経費の関係で簡素化されたためである。

十六日には、早朝からシニグ元の婦人によつて御酒が作られる。ミキには白御酒^{シルミキ}と黒御酒^{クルミキ}の二種があるが、最近では白ミキのみを作り、黒ミキは普通の焼酎で代用され

る。白ミキは新米を石引き臼ウスでつぶすか臼ウスについて粉につぶし、それに水を多く入れたうすい粥を炊いてカメに入れておく。そうすると翌日の夕刻頃には酒の感じが出るようになる。黒ミキは以前には米の麴をたてて作られていたようである。『万葉集』巻十九には、黒酒クロキシロキ白酒クロキシロキ（四二七五）、『続日本紀』の「三八詔」に「黒紀白酒」、『延喜式』の「大嘗祭・新嘗祭」にも「黒酒白酒」が作られていたことが見えている。本土の古代でも重大な祭りに、この二種の漕が作られていたようである。

右の白ミキ製法とは別に、明治初年または江戸末期から以前の与論島では、酒（ミキ）を作るに際しては、未婚の年少のメエラビ（十五、六歳から十七、八歳）の数名が、数日前から刺激物や臭気の強い物や腐った物を食わずに、常に口の中を浄めておいて、前もって水にひたして軟らかくした米を口噛みして、それを桶の中に吐き出し、表面に浮いた涎ヨダレや泡粒を竹の皮ですくい取り、一晚おいて発酵させて作っていた、と伝えられている（昭和十年に高齢者による調査）。

六 十六日の前夜祭

八ニクサアクラでは前夜祭が行われるが他のサアクラでは行われず、ニツチエエサアクラではわずかに宣言奏上のみが行われているにすぎない（昭和三十二年）。昭和初期にはいずれのサアクラでも行われていたようであるが、大東亜戦争後の現在では行われないサアクラが多い。八ニクサアクラでは、夕刻五時頃から六時頃までにパラチの男女が、焼酎やマサムヌを携えてサアクラに集まる。サアクラでの神体は東方の自然の樹木と石である。その前に三方を置き、その上にガジマルの小枝を立て、飯碗に水を盛り中に竹葉ササを浮かべる（ニツチエエサアクラでは東方のサアクラの柱を神体に行っている）。この形式は、いずれのサアクラでも行われる。パラチ達は当年の新米一合ずつシニグ元に持参して供える（他のサアクラも同じ）。

参加者の服装（ここには、昭和三十二年の八ニクサアクラの模様を記す）は、

祭主（高井治盛翁） 赤帽子（フチなし・冠代用）を

かぶり、白衣、白足袋をはく（昭和五、六年までは
治盛翁の前祭主は勾玉クガを首にかけていた）。

又ル相当役 白鉢巻・白衣・白足袋
旗持ち 白タスキ・白赤二色の鉢巻き

氏子（パラチ） 服装は和洋自由。一同はサアクラの
中に座る（座りきれない者はサアクラの外に座る）。

祭主と旗持ちやパラチの服装は、どのサアクラも大同
小異である。「又ル相当役」は、戦後はハニクのみ置か
れている。ユントウクサアクラでは昭和初年又ル相当役
がいた。

降神の儀

神に合図する祭主の、オオオオの唱え声が太鼓の
音に和してひびく。

二拝二拍手

祭主の行うのにつけて皆も行う。

宣言奏上ヌシゲトウ（ハニクサアクラの宣言・昭和三十二年）

トオトウ トオトウ トオトウガナシ シニグ又神

ガナシ 今日キヤ 十六日ジュウルクニチ又日ヒ 種々クサクサ又物 供スナイ

テイ サアクラ造りチク 準備又日ジュンビ 明日アツチャアカラ 三日ミツカ

又祭マツり方シチ 御取ウツイ持ムチシ 拝ラウガミシユクトウ

受ウキ取トウテイ 賜タバアリ 此フウ又屋敷神 吾元アムトウガミ神 御ウ

取トウイ持ムチシ 拝ラウガミヤアビユラン トオトウ トオ

トウ トオトウガナシ

二拝二拍手

祭主につけて皆も行う。

「トオトウ」は、「尊い・ありがたい」の意に用いら
れるほか、「祭祀」の意にも用いられる。「アムトウ神」
は、わが元のすなわち遠祖の神の意。第一人称代名詞の
「ア」は、今の口語では廃用化されている。

宣言奏上を終えてから、パラチの持参した焼酒ミキやマサ
ム又を開いて、まず神に供え、祭主・又ル相当役・旗持
ちへ献げお互いに配り合って酒盛りサカムが始まる。マサム又
は木の葉に盛って出される。適当な頃に「神遊カミアスビ又歌」
が、三味線や太鼓の音に合わせて歌われ、祭主・又ル相
当役・旗持ち・長幼の氏子の順に舞いが行われる。

シニグ神歌の歌詞

曲調は、昔イキントオブシか、ミチイキントオブシに
て歌われる。

アマ カミサマ 天又神様ヨオ 生命長ク賜バアリ 穀又神様ヨオ 真

グミタ 米賜バアリ

アマミタ 雨賜ボオリ賜ボオリ 風旱イ有ラスナ 島ガ富ドウ

カテイヒテイ 世ガ富 有ラチ賜バアリ

ク ナカ 此又庭又中に 桃又木植イテイ 此リガ花咲カバ 世

フウマアグミ ガ富真米

しばらく歌舞が行われてから、一同は祭主の拝礼（二拍二拍手）の後をつけて拝してから退散する。

ニツチエエサアクラの宣言（昭和三十二年、祭主・

市来嘉平翁）

トオトウ トオトウガナシ 斯ッシ 神路作り サ

チク アツチャア 阿克ラ造り 明日カラ シニグガナシ又御祭 清

ワッガ ラ拝ン シャアビユウクトウ 我大神ガナシ 清

トウ ラ受キ取イシ 賜ボオリ トオトウ トオトウガナ

シ

「我大神ガナシ」は、私の氏族の遠祖の神さまの意。

遠祖を尊んでウプカミと言っている。

七 御迎ケエと御送イ

「ウムケエ」とは、島の開発祖神や氏族の遠祖をお迎えすることであり、「ウウクイ」とは、それらの神が天へ帰ることをお送りすることである。明治三年までは「又ル」は、ウムケエ祭・ウウクイ祭・ウンジャン祭の三つの祭事を行っていた。ウムケエは「神迎イ」、ウウクイは「神送り」とも言われる。与論島神話によれば、与論の最初の開発祖神は、アマミク（奄美本島神話ではアマミコ）、シニグク（奄美本島神話ではシニレク、稲穀の神）であつて、前者は女神、後者は男神であつた。この男女両神が与論島を開発して稲作を広めたようである。茶花・立長・グシク等のシニグ祭には、この開発祖神の降神（神迎え）と神送りを内容としているようである。麦屋方面では、以前には前者の神にティルコの神（山幸神）、ナルコの神（海幸神）を加えて送り迎えをしていたようである。ティルコ・ナルコの神は、比較的後世の新しい神であるが、それをも含ませていた。この二神は、アマミクとシニグクよりもずっと後世に、東方遙かなティルコとナルコの国から海を渡り与論に上陸したと伝えられている。

明治末期または大正初期の頃までは、麦屋のシヨオ・サキマ・キンのサアクラでは、シニグ祭の始まる日の朝早く、シニグ元の祭主がアアサキウガンの遺跡に行つて、「^{ミチユモラ}三年廻り又、シニグ祭、シャアビユラン」(三年に一度 その年を入れて、隔年ごと 回ってくるシニグ祭をしましょう)と告げ、その後浜に下り潮水にて身を浄め、浜の砂をサアクラに持ち来たつて、サアクラを浄めることをしていた(アアサキウガンの地は、与論島に最初の開発祖神アマミク・シニグクが渡り来た上陸地であると伝えられている)。その後の開発祖神の上陸地と伝えられている所は、テイラサキウガンとクルパナウガンの地である。昭和十年頃までのテイラサキウガンの地では、シニグの十六日夜からこもつて身を浄め、十七日の本祭当日氏はテイラサキから神路を通り、途中四力所で神石を回る神事を行い、島の中央のタカヤパンタに至っていた。クルパナウガンの地からも同じ神事を行つてタカヤパンタに登っていた。

タカヤパンタではパルシニグが行われた。グシクや朝戸のサアクラでは、シニグ旗を先頭にタカヤパンタのパ

ルシニグを迎えることをしていた。これを迎イシニグまたはムツケエシニグという。テイラサキウガンの地を神を迎えるのは、グシクマササアクラとメエダサアクラであり、クルパナウガンの地ではプサトウサアクラとユントウクサアクラが、神を迎えることをしていた。ムカイシニグの祭主が、世柄^{ユウガラ}(世代または時代のありよう、ありさま、豊年吉凶)を聞き、パルシニグの祭主が神託のユウガラを氏子に告げるということをしていた。

十七日の本祭の直り会^{ノラ}会^ア(酒盛り)の後、パルシニグを先頭にしムカイシニグの氏子を後に従えて神ウウクイをしていた。今では東方を拝して神送りをするサアクラが多いが、以前の麦屋のサアクラでは海辺まで神を送り届け、シニグ祭神事に使った物を、海に流し捨てるということをしていた。

八 十七日の本祭

今では大分簡素化された形態で祭事が行われている。

ここには、第四期シニグ時代の 大正末期から昭和十年頃

まで行われていた模様を記述する。午後五時頃（シヨオ
 サアクラではもつと早く）から、氏子やパラチ達は、晴
 れ衣を着て老幼男女うち連れ、焼酒ミキやマサム又を携えて
 サアクラに集まる。どのサアクラでも、東方の神体の前
サンボウに三方を置き、その上にガジマルの小枝を立て、飯碗に
 水を盛り中に竹葉を浮かべたものを載せ、稲穂三本供え
 た（今でもニツチエエサアクラでは稲穂を供えている）。
 祭事は祭主の二拝二拍手に続いて宣言奏上から始められ
 るのである。

宣言奏上の内容は、サアクラごとに幾らか異なってい
 る。八ニクサアクラとニツチエエサアクラの宣言は、比
 較的内容の充実した長文のものである。宣ノり言の内容は、
 昔から祭主によつて伝えられてきたものが多い。ここに
 は代表として八ニクとニツチエエの両サアクラの宣ノり言
 を記述しよう。

八ニクサアクラの宣ノ言ヌリゲトウ

（祭主高井治盛翁、昭和三十二年）

二拝二拍手

トオトウ トオトウ トオトウガナシ 此フウ又屋敷ヤシキ又
 神ガナシ 今日キユヤ 身心ミイクルタナビテイ シニグ又神様カミサマ
 天降アマウリ参マアチュル 迎ムカイル事ケトウヤ 島シマ又子孫クワアウマカ 待マチ
 カニテイ 居ワウイクトウ 与ユンヌ論ヌ又 高タカサル 処トウクル降ウリ
 テイ賜タバアリ 悪ワツサル事ケトウヤ 夜ユル又守ムリ 昼ヒユウ又守ムリ
ユル夜又ウ月ツキサマ様 昼ヒユウ又ウ日ヒ様 天照アマテイラシユ大神ウフカミ又 始ハジミ
 テイ 国クニツク作ツクリタル例タミシ 神カミ又代ユウ又神カミガミ々 御取ウトウイ持ムチシ
フウガ拜ウガミヤアビユラン 千セン年ニン万マン年 大ウヒサ小イニサ 拜ウガミヤア
 ビユラン
 世界シケエ又始ハジマリヤ 国クニ又始ハジマリヤ 御天ウテイニイチドオ一同 世界シケエ
 一同 龍宮リウウグウイチドオ一同 三方サンボオ又大ウフカミ神 世界シケエ円エマルチャル 国クニ々
 島々シマジマ 始ハジミタル神カミ様 八百万ヤブユルツ又神カミサマ様 今ニヤマガ今ニヤママデイ
 千シン又千シン人 万マン又万マン人 集チドウウテイ 拜フウガミヤアビユウ
 トウ 益マスマスサカ々栄ムヌイラチ 作チクイ物ムヌ有ムヌラチ 世ユガ富フウ又 神ササ
 マ マアブテイ 賜タバアリ 旅行タビユキ 島中シマジユウナイ 病ビヨオ
 気キ 有ムヌラチ賜タバンナ
 今日キユ又 供スナイ物ムヌ 諸ムウル 供スナイタルカイ 汚ユケリ穢キガリ
 有ムヌラ又エエクトウ 捧ササギマツリ シャアビユラン ト
 オトウ トオトウガナシ

二拝二拍手

「身心タナビテイ」とは、身も心も穏やかに平らに
てとの意。「世界マルチャル」とは、世界のごたごたを
円めて穏やかに平和にしてあるとの意。「マアブテイ」
は「見守って」との意。「供イタルカイ」とは、供えて
あるかぎり（あるだけ）との意。「カイ」は、かぎりま
たはだけ（のみ）の意を表す語。

ニツチエエサアクラの宣言ヌリクトウ

（祭主市来嘉乎翁、昭和三十二年）

二拝二拍手

アア トオトウ ヒットオトウガナシ 島シマ又始ハジマリ
世ユウ又始ハジミンシャアチ 賜タバアチャル 我根地ワアニイチ又 神様カミサマ
ガナシ 我大神様ワアウフカミサマ又 定サダミンシャアチャル 此処フウマ又
シニグ神 吾元ワアムトウ又 神ガナシ
今年フウトウシ又 酉年トウイドウシ又 三年廻ミチユモロリ又 シニグ又 初ハジミ
又御祭ウマツリ 我大神達ワアウフカミタア又 氏子ウチクワア 諸ルムウウチ揃スルウテイ 清チュ
ラ拝ヨツガン シャアビユウクトウ 内外ウチバア又 島中シマジユウ又
子孫クラアワマガ 石イシ又力チカラ 金銭ハニ又力チカラ 有タラチ賜タバアチ 生命イヌチ

長ナガク 有タラチ賜タバアチ 島中シマジユウ又 諸々ムウルムウル又 マガ事グトウ

被ハライ浄キユミ 打ハラチ被ハライ 見ハテイマブテイ 風ガイ又害ビライ 早ハニイ

又厄ヤク 有タラサンガネエシ 五穀ゲクク又 石イシ又ミイ 金ハニ又ミ

イ 実ミイ入ミイリラチ 四ユウ手バキ足バキ又 脚強バギチユク 生命イヌチナガ長ナガク 有タラ

チ賜タボオリ

来キユル 亥年イヌドウシ又 今日キユウマデイ マアブテイ 賜タバ

アチテイ 世ユガ富ブウ 続チチ力チチチ 賜タボオリ 我大神ワアウフカミガナシ

アア トオトウ トオトウ トオトウガナシ

二拝二拍手

「ヒットオトウガナシ」の「ヒツ」は、「チツ」の形
にても表され、感動詞の「アア」に類似する意をもつ。

「根地」は、根元の地すなわち元の屋敷の意。「定ミンシャ
アチャル」は、定めをしてあるとの意。「石のミイ」は、
石のあいだまたは石と石の間（目）の意。

宣言奏上が終わって祭主・ヌル相当役（ハニクでの

み）・旗持ちに対し、白ミキと黒ミキ（焼酎）が献げら
れ一同にも白ミキが配られる。遅れてきた者は自分でカ
メから白ミキを汲んでいただく。子供達（五、六人から
十人くらい）は白鉢巻きをして、デエク（竹葉に似たも

の・ササ)を持ち、サアクラの周りを「ウウベエ、ハアベエ」と唱えながら左の方へ打ち振り被いながら三回回る(ウウベエとは、諾・よろしいの意、ハアベエの意味未詳)。氏子の持ってきた焼酎やマサム又を神に供え、祭主・ヌル相当役・旗持ちに献り、皆にも分け配られる。この場合ニヘエ(供応・食べ合い)がなされるので「ニヘエサクラ」とも言われる。

次に、シニグ神歌が太鼓や笛や三味線の音に合わせて歌われると、祭主・ヌル相当役・旗持ち・氏子パラチの順に舞いが行われる。この舞踊を「神踊イカミヲドイ」という。酒盛りをして適当な頃にワカリサアクラから三回迎えに伺う。これはムカイサアクラ又はムケエサアクラとも言われる。ワカリサアクラの使者は、「御供ウツムシ為ラリテイ賜タバアリ」と告げる。それからシニグ元のサアクラの、同は行列をなして、シニグ神路を通り、シニグ旗を先頭に、祭主・ヌル相当役・笛吹き・太鼓打ち・三味線弾き(数人)・氏子やパラチ(焼酎やマサム又を持つ)の順に奏楽賑やかにシニグパンタに登る。シニグパンタ(シニグ山とも)は、見晴らしのよい所でやや広場になって

いる。シニグパンタは地名を冠して、ミダラパンタ・タカヤパンタなどと言われる。旗をシニグ山の北方の石穴に立て、広場には菘またはゴザが敷かれ、東方に祭主が座り、祭主の前にはシデを懸けたサカ木と青竹の一本ずつが立てられ、竹の上の方には十字形に小竹を横に結びつけ、これに白・赤・青の布を懸けて垂れさせる(江戸時代には五色の布)。氏子達は祭主の前の左右に座る。

祭主はサカ木に二拝二拍手して、次の宣言を奏上する。

清チユラ受ウキ取トウイシ 賜タバアリ

そこでパルシニグが行われる。パルすなわち原野バルヌにて行われるから、かく名付けられる。次に氏子達の持参した焼酎やマサム又が開かれて酒盛りが始まる(パルシニグは、『古事記』の「天の岩屋戸の変」を連想せしめる)。

そこへ旗を持ち緋色の下裳を着け、ブドウ状蔓草ツルを禪タスキにかけ、赤いウチクイ(頭布)をかぶり、首に勾玉ハを佩いたヌル相当役がやってくる(昭和初期の朝戸やグシクハのシニグで)。このヌル相当役は、神小屋または洞穴イヨオにこもり禊して夢の中に神の託宣を受け、世柄ユウガラや次の年の稲作の吉凶をシニグパンタの祭主に告げるのである。そ

のお告げが終わると、ワカリサアクラの方では別のパンタからこちらへ向かって出発の合図をする。その合図を見てシニグ山の元サアクラの一同は起立する。ムカイサアクラの行列が、奏楽賑やかに歌いかつ踊りながら、シニグパンタの頂上近く来た時、神石の周りを、

ウケベエ ハアベエ

と唱えながら各人ササ葉を振りつつ三回左へ回る。そこへシニグパンタにて祭主に神の託宣を告げ終えたヌル相当役が降りて来る。ムカイサアクラの全員は地に平伏する。それからヌル相当役の後に従ってシニグパンタに登る。パンタでは祭主とヌル相当役と旗持ちを中心にして、その周りをワカリサアクラ（ムカイサアクラ）の者が三回、「ウウベエ、ハアベエ」を唱えながらササ葉を振りつつ左へ回る。次に、元サアクラとワカリサアクラが合

同して、ウフパララジウフチイタニ ニヘエア大親族大血種の饗合いが始められる。元サア

クラの祭主へ焼酎やマサムヌが献げられ、皆にも分け合ウフサカムい大酒盛りが行われる。次に頃合いをみて神遊びに移る。

三味線や太鼓の音に合わせて全員の斉唱や舞いが次々に出る。この場合の歌舞はいとも楽しく自由に行われる。

（以上のパルシニグは、大東亜戦後は大分簡素化されたり行わないサアクラが多く、パンタにて合同の酒盛りをするサアクラも少なくなつた）

やがてうす暗くなりかけた頃、元サアクラの氏子達をパンタに残し、ワカリサアクラの者達は、白布を頭にかぶり田の中に降りて行く。パンタの氏子は赤い布をかぶり、両方から奏楽賑やかに響かせつつ、弓矢の擬戦を始める。両方から三回ほど攻め合い、ついにシニグ山の部隊が勝つ。次に祭主が田に弓矢を放つ神事を行う。（ニツチエサアクラでは、若干刈り残しておいた稲穂に載せた的を射ることを戦後も行っている。ニツチエエ・プカナ・サトウヌシ スウマ の三サアクラの祭主が次々に矢を一本ずつ放つ。戦後は的が近いので皆当たるが、以前には的が遠くて当たりにくかった。的に当たった翌年は豊年であると喜ばれた）

弓の矢を田に放つ理由について市来嘉平翁は、次の世ユが富フツの豊作を射止めるためだと語つたが（昭和三十二年）、他の古老は、氏子の者達が互いに武技を練り、他の種族に負けないような実力を蓄えおくことをした名残

であるという。麦屋の大峯山での弓放ちは、シヨオサア
クラの祭主が、

奥山 ウクヤマ 辺土山又 ビドゥヤマ 猪又真マン中 シシ マア ナカ

と唱えて沖縄の北端に向かつて弓を放つ。以前は二十本
くらい放たれたが戦後は五本くらいですませるように
なった（奥と辺土は北部沖縄の地名である）。

弓矢の擬戦と田に弓を放つ神事が終わると、全員が田
んぼの中に集まり、ササ葉を振りつつ、

我が殖ヤチャル稲ヤ シニ 刈り良シ ユ 刈り良シ ユ

と三回唱えてササ葉を田の中に投げ入れる。次には神送
りをして十七日の本祭を終え退散するのである。

他方、各氏子またはパラチ家庭の者達がシニグ祭に出
掛けた後で、十二、三歳から十五、六歳までの少年達に
よつて、「屋内被」ヤアウチハラと称する行事が行われる。少年達は
五、六人から十人くらいで班を作り、手にデエクを持ち
白鉢巻きをして、宗家の大家から順に氏子たちの屋内を
被い回ることをする。まず東の戸口から入り座敷の中を
三回デエクで打ち振り被う（麦屋方面では家の外を左廻
りで三回）。次には、グシクマシニグでの少年達の唱え

言を、例に記そう。

グシクマサアクラ イ 出ヂタル イチミ 泉又如 グトゥ
早童又 サウラヒ ウウベエ ハ アベエ

唱え終えて神床に供えてあるダンゴをいただいて、西
の戸口から出て行く。（麦屋のシヨオでは、氏子達の家
の供え物とお酒を頂く。おにぎりは竹製のテルに神酒は
徳利に納め、それらをサアクラに持って行き、酒は大人
にあげ自分達はおにぎりなどの供え物を分け合って食べ
るということをしていた）

九 十八日の二日目

大東亜戦後は、経費の関係で二日目の十八日は、中休
みと称して神事を行わないサアクラが多いが、以前には
サアクラに集まって神事と酒盛りが行われていた。しか
し、ニツチエエサアクラにおいては戦後でも行われてい
る。ここに、ニツチエエサアクラでの模様を記そう。

午後五時頃から氏子やパラチの老幼男女が、晴れ着を
着てサアクラに集まっている。（昭和三十二年の模様）
氏子達は祭主に村し、

昨日キノオヤ 被パロオテイ賜タバアチ トオトウガナシ

と謝辞を述べそれぞれ座につく。アムトウのシニグ神の神体たるサアクラの東隅の柱に白ミキと黒ミキを供え、祭主の二拝二拍手に始まって、宣言奏上が行われる。

トオトウ トオトウガナシ 今日キユウ又 十八日ジュウハチニチ 二フチ

日目カメ又 シニグガナシ 斯ハッシ 清チュラヨウガ拜ン シャ

アビユウクトウ 清チュラ受ウキ取トウイシ 賜タボオリ トオ

トウ トオトウガナシ

二拝二拍手

宣言奏上を終えてから、祭主は立ち上がり旗持ちを従え、アアジンケエの社（昔の豪雄アアジンケエを祭った小社）に参拝し、神酒を三杯献上する。その後サアクラに帰り、まず祭主が白ミキと焼酎を頂く。次に旗持ち、長幼の氏子の順に男女が頂く（子供は白ミキだけ頂く）。

次に酒盛りが行われ、氏子達のなごやかな歌舞が、三味線と太鼓の音に合わせて行われる。頃合いをみて一同は退散し二日日の神事を終える。（アアジンケエは、対琉球戦の時の豪雄であったと伝えられている。その小社

に参拝する行事は、シニグ祭が起こってからずっと後世に結び付けたもので、シニグ本来の神事ではないとみられる）

十 十九日の三日目

シニグ最終の十九日は、直会ナラライやサアクラ直し、神路直しの行われる日である。ここには、ハニクサアクラとニツチェエサアクラにおける神事の模様を記そう。十七日の本祭の場合と同じく、氏子やパラチ達は、午後五時頃から晴れ着を着て、焼酎やマサム又を携えて老幼男女がサアクラに集まる。白ミキと焼酎を神に奉げてから、次のような祭事が始まる。（昭和三十一年）

ハニクサアクラでの模様

二拝二拍手

昇神の儀

オオオー（祭主の唱え声が太鼓の音に合わせてひびく）

宣言奏上

トオトウ トオトウガナシ 三日ミツカ又 シニグ又 祭
リ又マチ 天上テインヌブテイ 賜タバアリ 次チキ又シニグ又時トウキ
ウミ又子孫クワアウマガ 待チカニテイ 居ラウイクトウ 天降アマウリ
テイ 賜タバアリ トオトウ トオトウガナシ
二拝二拍手

ニツチエエサアクラでの模様

二拝二拍手

宣言奏上

トオトウ トオトウガナシ 今年フウトウシ 三年ミチユ廻モラリ又
シニグガナシ 十七日カラ 十八日ジュウハチニチマデイ 良ユツタ
アシャ 清チュラ拜ヨウガン シヤアビユタクトウ 今日キユウ又
三日目ミツカミ又 サアクラ直ノラシ 定サタミンシャル通トウウリ 清チュラ
拜ヨウガン シヤアビユウクトウ 来イヤンチュユル 再来年イヌ又 亥
又年トウシ又 シニグマデイ 氏ウチクワア子クワアウマガ 子孫イヌチナガ又 生命イヌ長チク
有バラチ 島中シマジュウ又 諸々ムルムル又 マガ事ゲトウ ウチ被ハライ 内ウチ
外バ又 子孫クワアウマガ 見イマブテイ 五穀ゲククユ世フウガ富ユウ 四バギミチ足見
イマブテイ 災厄ウチ被イ 後増マサイ増マサイ 世ユ
ガ富フウ 有フウラチ 清チュラ拜ヨウガン 為シラリテイ 賜タボオリ

トオトウ トオトウガナシ
二拝二拍手

八ニクサアクラでは、降神の儀と昇神の儀が行われる。これを行うのが本来の神事である。他のサアクラでは行われない。宣言奏上を終えてから、祭主・ヌル相当役（八ニクでだけ）・旗持ち・氏子パラチ（長幼）の順に白ミキと焼酎を頂く。これから後は直会で、酒盛りしつつ歌舞が今までよりも一層楽しく賑やかに行われる。歌曲や歌詞の順はサアクラごとに若干異なる。ここには、次の二首の歌詞を記しておく。

白髪親ガナシ 床トウク又前飾メエカザテイ 産ナシ子歌グワアウタシ為チミテイ
孫ウマガ 踊ヨウトウラサン
歌ウタ又始バジマリヤ 日本ヤマトウカラ降クダリ 中留ナカトウマイヤ永良部
果バテイヤ与論ユンヌ

しばらく歌舞遊びが続けられてから、サアクラ直シ（小屋の後片付け）、神路直シ（踏みつけた畑などを元に復する）が行われ、退散してその年のシニグのすべての神事を終えるのである。

与論島のシニグ祭は、祭りの規模が雄大でその意味内容が深く、その解釈への接近は到底できない。どこにも見ることのできない特色をもった祭祀である。日本民族の原初の古神道の形態を伝えているものであろう。

第八章 その他の諸祝祭

ここにおいては人の一生におこる人生儀礼・冠婚葬祭やシニグ祭のほかの祝祭を挙げることにする。

一 正月ニゲー（正月願い）

正月ニゲー・八月ニゲーの「ニゲー」に「願い」を当ててあるのは、この祭りで唱える言葉に霊の冥福を願う言葉がこめられているからである（栄喜久元著『与論島の民俗』）正月ニゲーは主に漁獲に行き海で死亡した霊の祭りであるが、地上の変死者についても行う。祭りの方法は一樣ではない。

麦屋の栄家本家は現在九代目であるが、四代当主の弟

がイカ釣りに出て遭難しこの祭りを行っているので、他の二例を合わせてつぎに記す。

祭りへの参加

祭りに参加する範囲 男系を本体とするが姻戚関係者で畏敬の念を持つ者、海上の事故で同船して生存在者の子孫。

キエ（禁忌） 祭主家はもちろん、祭りに参加する家は子供といえども不浄の場所（黒・赤）に出入りしてはいけない。その期間は祭主家の慣行によって異なるが、明治・大正はたいてい一カ月であった。それ以後三週間、二週間、十日と縮まっている。

祭主家で不浄がある場合 祭主家で祭り当日（正月元日）禁忌期間のうち）までに不浄が察知される場合は、そのことを霊に告げて繰り上げるか、不浄が晴れてから行う。

参加すべき家に不浄があり、また予知される場合 事前に祭主家にその旨を告げ、酒一合・米一合ぐらい持参して代理を依頼するか、禁忌期間前であれば本人が霊前でことわりを言上した。

祭りの方法

慣行にしたがって厳格に禁忌を守り、清浄な身で当日を迎えねばならない。

霊前に供えるもの 祭主家の慣行によって異なるが、一例を挙げると、酒かんびん一本・米一合・ピーム又（乾魚・コンブ等少量）を参加者家別に膳に載せ、杯を添えて供える。

祭主のあいさつ 祭主は一同に対して、祭りの宣言をする。「これから清めた身で正月のカミフガン（神拝み）をいたします。一緒に美拝して給しようーりと述べる。

祭りの言葉（祭主が霊前で唱える）

ヒットートウ

いまここに あなたの子 子孫 みな

あらたまつて集まつて そろつて

海山の品々 初穂 初物 供えてヒットートウ

美 拝 しゃびゅーし ヒットートウ

内 外の子 子孫に タタイゲトウ チカイゲ

トウ

あらしめて くださらないように ヒットートウ

島のある間 大地のあるナゲー

元気に あらしめてくださつてヒットートウ

作いムジクイ 島ぬ世が富 アラチタペンシヨウチ

美しく拝まれ

美しく願われて 給ーリ ヒットートウ

と唱える。唱えごとが終わると各人は膳の杯に御酒を

そそぎ、数分黙禱して霊の啓示を待つ。その間に異変

（杯の御酒にヨゴレ、塵が入る、蠅が飛び込む等）が

なければ祭りを受け取られたということになる。もし

異変のあつた人は退出しておいて、後刻にあらためて

おわびの言葉を申し上げて願わねばならないといわれ

ている。

祭事が異変もなく滞りなく終わると人々は「美拝

みでございました」と互いにあいさつを交わし、それ

からはじめて新年のあいさつがなされる。そして祭主

家から吸い物が出され各人が携帯したカラカラの酒を

交換して新年の祝いを催す。

正月二ゲーを受ける霊は、日常は子孫をミーマブ（見

守る）り、いつくしむ霊であるが、正月ニゲーの対象としての霊は荒神になる。それは畳の上の死は安楽であるが、海上での死は大変いたましいことで、それを忌むことからこの祭りが行われるようになったのではないかと思われる。

二 八月ニゲー

八月ニゲーは、大工・鍛冶屋・ノ口・ヤブ（ユタ）等を職業としていた霊を祭っている。祭日は旧暦八月一日から四日までの間に行う家もあり、また旧暦八月二十三日を祭日としている祭主家もある。

八月ニゲーも正月ニゲーと同じように祭り当日までキーエー（禁忌）をして、赤・黒不浄に出入りしてはならない。キーエーの日数は昭和初年頃まで三十日の祭主家もあったが、十四日、十日、七日と短縮されている。

祭りの方法は祭主家の慣行によって一様ではない。麦屋の一事例によると、正月ニゲーと同じように御酒カンビン一本・米・乾物を持参し各人一膳に供える。

この祭りに参加すべき者は男系の子孫であるが、婿、

嫁の親・兄弟が敬意を表して参加している例もある。一度この祭りに参加した者は、その後祭りに出なければならぬ慣習のところがある。

八月ニゲーにはそれぞれ大工道具・ノ口衣・金鎚など遺品を神前に供えるものであったという。祭主が神前で唱える言葉は、正月ニゲーと大体同じ内容のものであるが、チケー・タタイをあらしめないようにと願う言葉が何度か繰り返される。それは大工の金尺は魔除けに、鉄片を拾って屋敷内に入れてはいけないなど、祟りがあるとされるからであろう。

大工・鍛冶屋は外来の新しい知識と技術の保持者であった。ノ口は司祭者であり、ヤブ（ユタ）は神託を受けて人生を占う予言者でもあった。したがって一般人と異なり、畏敬の念を持って祭ることは当然のことであったと思われる。

このように畏敬される霊であるが、祭りを滞るとか汚すことがあれば荒神となって崇るとされ、恐れられたのである。

三 ウンジャン祭

与論島ではウンジャン、沖永良島ではウンミ、沖縄ではウンジャミといい、海神の祭りだといわれる。ウンジャン祭りは、シニユグ祭りや、各地のウガンの祭りとともに明治三、四年ごろ常主神社に合祀された。ところが災厄（プーキガマラシャ）が相續いて起こった。ヤブ（ユタ）の口（占い）によると、ウンジャン・シニユグの神の祟りであるということで、島民の間からウンジャン・シニユグの復活の議が起こった。そこでシニユグは全島民が参加する祭りであったので祭りの方法を記憶しており、明治三十二年に復活した。ウンジャン祭りはヌル（ノロ）の行う祭りであったため、ノロ筋の家でも作法を継承しておらず、ついに復活することができなくなっていたという。

ただ故文字志翁の話（昭和二十五年聴取）によれば、ウンジャン祭りを見たことはない。年寄りの話によると、頭にウンガラ（甘藷蔓）カンショツルをまき、首に連玉（ムレダマ）をはき、白衣を着けていたそうだ。みんな杖

をつき、手首にガラガラ音のする貝殻のようなものを下げており、それでウンジャンガラガラとよばれたという。祭りの場所はウガン（神所・拝所）の前で立ったり座ったりしながら、声を合わせてうたっていたそうだ。海の神様を祭ったり、海上の安全を祈る祭りだったそうである。

プーキガマラシャ（災厄をもたらす悪神が横行する）のある時は、道の辻で向き合って杖をつつき、ガラガラ音をたてながら唱えて悪魔ばらいをした。八キビナの浜で祭りをしたそうだということである。

沖繩の海神祭は島袋源七著『山原の土俗』（昭和四年初版）に

海神祭は、海神を祭る儀式で、俗にウンギヤミ又はウンチャミ又ウンガミとも称えている。この儀式は部落に依って、名称並に式典の模様も異なりまた目的も異なっているが、今古老より聞いたまゝを繁を厭はず記して、各村に遺つてゐる式典の模様を保存して置きたい

と前おきして、国頭村辺戸、国頭村与那、安田、辺土名、崎本部、大宜味城、塩屋等の海神祭の様子を記録してある。

与論島のウンジャン祭りは、文字志翁の話によつてその片鱗が伺えるにすぎないが、沖縄の国頭郡沿岸の各村や中頭郡の一部に行われているのと同じ系列のものと思われる。

四 ハージャーの祭り

鍛冶屋のことをハージャーといい、造る人をカンデーク、またはハンデークという。金（ハニ）大工・鉄大工の意である。

与論島の鍛冶屋は現在新旧含めて西区二・朝戸三・城一・立長三の九カ所で、そのうち二カ所は昭和四十年以降に設立されている。昭和十年頃まで茶花港旧棧橋の南たもとに掘つ立て小屋を造り、沖縄の人が鍛冶を営み、盛況であつた。

与論島への鍛冶技術の伝播^バについては記録がないので、確実とはいえないが、口伝をもとに調査した森栗茂一氏の論文「南西諸島鍛冶職の伝播と定着 与論島の鍛冶職」

（季刊『人類学』15 3）によれば、国頭村奥、国頭村喜如嘉、今帰仁、勝連から鍛冶技術者が来島して伝播したことを示している。

麦屋の古老の伝承によれば、与論島で古いハージャーは西区のニジャゴー・サキマと、朝戸のメーダ・イシブリだという。

ニジャゴーのハージャー祭

時代ははっきりしないが、周知されている伝承では今のニジャゴーの場所はアダンが茂つていて、その中に逃げ込んだ猫を追つて入った犬がぬれて出てきた、またはぬれた猫が出てきたので泉のあることが分かつたという。それで泉の南側をハージャーにして、シヨ（井戸の東側近く）に住んで鍛冶を営んだと伝わる。

祭りはハージャーの現場で旧暦一月四日、八月二十四日に関係の一族が集まり、鍛冶道具に米・塩・ミキ（御酒）を供えて祭る。毎月の旧暦二十四日には、各家交代でミジの八チ（水の初・水と花＝ガジマルの杖）を供える。

サキマのハージャー祭

旧暦正月四日、八月二十四日は関係四戸が集まり現場で、鍛冶の道具一つ一つに米・塩・御酒を供えて祭る。毎月二十四日の水の初は元家で供える。

祭りの事例を二カ所挙げたが、つぎに鍛冶にまつわる一般通念を記す。鉄類を拾って屋敷内に置く、鍛冶屋の敷地内から鉄屑を拾う、鍛冶屋敷地内に小便をする、鍛冶屋に向いて小便することなどは崇るといわれて恐れられていた。また妊婦は屋敷内に入ることを忌まれ、常に清浄を保つため普通の日でもシメ縄を張り、祭りには清水で身を清めた。

五 アマグイ（雨乞い）

雨乞いは全国で行われていたもので、旱魃が続くときに、雨を降らせる神・雷の神を呼び起こし、雨を降らせてもらうために行った。雨乞いをする場所は、神所とされている聖所であった。二、三例を挙げると東区の赤崎ウガン・前浜の龍宮石を見下ろす崖の上・茶花のウガンチチ・那間のテイラサキウガンなどのように海の見える

場所である。

明治中頃までは、その神所を所有している地主、神所の祭りを平素行っている人が雨乞いの祭主になったというが、その後いつごろからか神主がのりとを唱えるようになったという。また総代をたてるとか、シニユグ集団の祭主をもって雨乞いの祭主にすることもあったといわれる。

昭和七、八年頃の麦屋西区の事例を挙げると、村行政末端の組織として組の制度があつた。西区でも十余りの組があつた。その組の幾つかが連合して雨乞いを行っていた。

前浜の龍宮石を見下ろす崖の上に集まって雨乞いをする幾組かの連合集団は、早朝まだ太陽の出ないうちに金属の音のするもの（鉦に相当する）を各自携帯する。その鉦を打ちならしながらうたう。

雨たぼり たぼり

いみたぼり たぼり

島が富ど 世が富

何度も何度も鉦をたたきながらうたう。この祈願中に祭りの中心になっている人が、

メーバローイ（前原＝前浜の神を呼ぶ）メーバローイ

ニブ（柄杓）又 ナーラ（半分）タバーリ

と呼びかける。何度も何度もアマタボリをうたい、半分開ださいと呼びかけ鉦を打ち、朝日の出ようとするところに、眼下の龍宮石の方向に礼拝祈願して終わる。

「ニブ又 ナーラ タバーリ（柄杓の半分ください）」と唱えるのは、柄杓のいっばい（満ばい）は洪水・水害が起こるという意味があるからだという。

右は西区の雨乞いの一事例であるが、島内では違った方法もあると思われる。

六 マチヌトートウ

マチヌトートウは火の神祭りのことで、「住」の項に記したように、平常の日は旧暦の一日、十五日にペンジャナシの上に塩をひとつまみ供えて清める古い慣行であった。

年間の祭りについて明治初年生まれの古老の話によれ

が、十月の庚午カフエウマの日にペンジャナシに塩と米をひとつ

まみ供え、カマドには同じく塩と米に、もち米を水に浸しておき、芭蕉の葉に包み甘藷を煮る上において蒸し（ウンチ）たものを餅のように固めて供える古い慣習があったという。このことは明治十三年生まれの古老も、少年のころの確かな記憶であるという。

明治七、八年頃の西区の事例を挙げる。村行政の末端組織であった石積組においては、寄り合いをして旧暦十二月に火の神祭りをした。祭りの日は神主（西区の故田野タニハル氏）に決めてもらった。祭りの準備として朝早く人の踏まぬ白砂を浜から取ってきてティルガマに入れておく。お膳に、御酒・塩・米を載せておく。

神主は戸別に家をまわる。カマドの火の心配のない場所にシベを立てる。家で準備しておいた左ないのシメ縄を張る。カマドの前に蓆を敷き、供え物の膳を供え、唱えごとをする。これがすんでからティルガマの砂をつかみ

六根清浄 六根清浄

と唱えながら白砂をカマドや土間に撒マいて清めた。

七 プナンケ

プナンケーは「船迎え」の祝いのことである。鹿児島では「サカムケ」というのがある。これは何十里も坂を越えて町や村に入る坂の下で、身内の者や知友が待っていて簡単な酒宴を催して無事を喜び「坂迎え」であった。

与論島のプナンケーも本来海上を無事に帰着した場合に行われる祝いであるが、旅立ちの祝いもプナンケーとよばれているようである。与論島の民謡に、

大和^{ヤマト}なが旅や 手拭がりや 朽たんぬ

冥土^{グシヨ}ぬ長旅ど 手拭や 朽ちゆる

とうたっている。大和路の旅と、死の旅と対比できるものではないが、ひきあいに出されるほど海上の旅は危険を伴うものであった。また民謡に、

船ぬ高ともに 白鳥やびし（座）て

白鳥やあらし ふない（姉妹）神どうえゆい

とうたう。ふない袖は航海安全の神で、プナンケーの祝いにはこのうたがうたわれた。

八 デーク祝い

旧暦正月二日に大工の棟梁の家で行われる。お膳に番

匠炬・墨壺を載せ、御酒・塩・米を供えて祭る。参加する人は棟梁のもとで仕事をしている人で、その年に新築等で世話になった家からも参加することもあった。

祭りが終わると、棟梁の家から御馳走が出て酒宴が催される。正月二日は、昔はパチパル（初原^ハ畑）といつてすこし仕事はじめをし、蘇鉄を植えたという。それで大工祭りも仕事はじめの祝いのようであった。舟大工も家大工と同じような祭り（祝い）をした。

九 プナマチイ（舟祭り）

漁獲の舟は、個人有・ムヨー（共有）・ムエー（個人所有舟で共同漁獲する）等で、この人々は旧暦正月二日に舟祭りをした。舟のプームチドル（舟の前方の帆柱を立てる所）に御酒・塩・米を供え、感謝と安全を祈念した。旧暦三月三日の浜下りには、その日にとれた魚貝を料理して供え、舟の傍らで盛大な酒宴をした。